

八人との
対話

司馬遼太郎

八人との 対話

司馬遼太郎

文藝春秋

楽

八人との対話

一九九三年三月二〇日・第一刷

著者・司馬遼太郎

発行者・阿部達児

発行所・株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三

電話 東京 三二六五―一二一一

郵便番号 一〇二

印刷所・凸版印刷

製本所・矢嶋製本

万一、落丁・乱丁があれば送料当方負担でお
取換え致します。小社営業部宛お送り下さい

目次

日本人とリアリズム……………山本七平 7

師弟の風景……………大江健三郎 113

歴史の聳音を聴け……………安岡章太郎 147

日本文化史の謎……………丸谷才一 183

鎌倉武士と一所懸命……………永井路子
219

宇宙飛行士と空海……………立花 隆
251

日本人は精神の電池を入れ直せ……………西澤潤一
297

ユーモアで始めれば……………アルフォンス・デーケン
327

装幀
坂田政則

八人との対話

しばらくようたろう（一九二三）

大阪市生まれ。大阪外国語学校蒙古語科卒業。
一九六〇年、「梟の城」で第四回直木賞受賞。六六年「竜馬がゆく」「国盗り物語」で菊池寛賞受賞。七二年、吉川英治賞受賞。七六年日本芸術院恩賜賞。八一年、「ひとびとの囃音」で読売文学賞受賞。八二年、朝日賞受賞。八四年、「街道をゆく」南蛮のみち」篇」で新潮日本文学大賞受賞。八七年「ロシアについて」で読売文学賞受賞。八八年「韃靼疾風録」で大佛次郎賞受賞。「街道をゆく」「この国のかたち」司馬遼太郎全集（全五〇巻）など著書多数。芸術院会員。

日本人とリアリズム

山本七平

やまもと しちへい（一九二二～一九二）

東京生まれ。青山学院卒業。一九五八年、山本書店を創立。その後、精力的な執筆活動にはいる。八一年、菊池寛賞受賞。著書に、「ある異常体験者の偏見」「『空気』の研究」「私の中の日本軍」「聖書の旅」「洪思翊中將の処刑」、訳書に「歴史としての聖書」「概説聖書考古学」「日本人とユダヤ人」（七一年・大宅壮一ノンフィクション賞受賞）「日本教について」など多数。

第一章 リアリズムなき日本人

私の軍隊体験

編集部 お二人が初対面だということのも意外だったんですが、今日は元戦車兵と元砲兵の対談ということで……。 (笑)

司馬 あまり好ましい話題ではありませんけど。 (笑) 山本さんは、たしか昭和十七年入隊の幹候 (幹部候補生) でしたね。私は十八年でした。

軍隊制度も半ば以上歴史になって、そのためになんだか幹部候補生制度というと、将校になりたい人が受けるのだろうと思われがちですから、説明しておかなきゃいけませんですね。

あれは明治からつづいた一年志願兵制度が昭和初年に切り替えられて、将校としての教育をもうすこしきちつとする。そういう発想ではじめられたんですが、それでも昭和十二年以前は、

ちゃんと大学を出た人で幹候を受けるような人は少なかった。やっぱり、農学校、商業学校出が多い。というのも、幹部候補生、つまり小隊長、というのは、歩兵でも何でも真っ先に敵に突撃するだけの機能ですから、一等兵や上等兵のままでいたほうが死亡率のはるかに低い。

だから、中隊長がいくら幹候試験を受けよといっても、逃げまわる。受けても、白紙で出す。こういう状態が、少なくとも昭和十四、五年まではつづきましたね。

山本　そうですね。

司馬　つまり、小部隊戦闘というのは、誰か真っ先に行くことが大事なんです。その真っ先に行くやつに多少の榮譽と能力をあたえておく。そういうことであの幹部候補生制度が生まれた。山本　私たちのころになると、選択・選別の自由は相互になかったですね。徴兵検査のときに、すでに幹部候補生の「志願の有無」という書類を出させられた。「志願しないものは別室に残れ！」というわけですよ。

司馬　逃げる手を封じた。

山本　ですから、私の時点ですでに本当の志願じゃないんです。「志願を命ず」みたいになっていた。ですから、私たちのころがちょうど切り替えの時期じゃなかったんでしょうか。

そのため、ずいぶんまごつきましたよ。学校の先輩からいろいろ聞かされているでしょう。幹部候補生になったら、どうしても五年だぞ。兵隊だと三年目に一度は帰されるけれども、また取られるかも知れない。どっちがいいのか、よく考えろ——とか。また、私たちのときまでだと、任官するまで、だいたい戦地に行かない。まず予備士官学校が一年ある。もしその一年

以内に戦争が終わるんだったら、むしろ予備士官学校に行っていたほうがいい。でないと、兵隊でどこかに行つてやられてしまう。こういうことをよく考えて願書を出すんだな、と。

で、当人はそのつもりで、まだまだ先の話だと思つてゐるわけです。入隊して一期の検閲が終わるまでは皆同じで、そこで志願するか否かを決めるはずだと。ところが、徴兵検査の時点でいきなり、志願の有無を書いて出せ、といわれた。聞いていた話と全然ちがうんで、まごつきました。

司馬 私などはいわゆる学徒出陣でした。文科系の学生の徴兵猶予の恩典をとり消し、いっせいに兵営に入れた。昭和十八年に初年兵で兵庫県の奥のほうにある戦車第十九連隊というところに入隊しました。幹候試験は否応もない。

ずいぶん殴られた

山本 たしかに昭和十七年ぐらいから、制度はそのままでも、実体はぐらつと変わりましたね。昔の話を聞くと、志願を「有」と書いても、あとで試験は白紙に近いものを出せば大丈夫ということだった。だから、うるさいから、とにかく「有」と書いておく。ところが、私たちの時代になると、白紙だろうと何だろうと、みな採^とっちゃう。ですから、ちょうどあのころで、聞いた話がすべて崩れてくるんですね。非常にまごつきました。志願しないと、「兵役期間を短くしたいのか!」と、しぼられる。

だから、何となく雰囲気で「有」と書いてしまう。

司馬　そうですか。それで成功したもんだから、こんどは一網打尽に学徒出陣にしたわけですね。それが、われわれの世代ですよ。文科系学生の徴兵猶予の特典を取り消すということだけで、全部を兵営に入れる。私は誓約書なんか見たこともない。全員が制度の中に入れられてしまった。

初年教育は、明治以来のシステムどおりでした。ここでは上等兵や一等兵の靴を磨いたり、ゲートルを解いたり、洗濯をしなければならぬ。しかし、私はついそ一度もしなかったから、ずいぶん殴られたけれども。だいたい自分の身のまわりひとつできない人間だもんだから、人のことまでできやしません。(笑)

それでも、幹部候補生は通っているんですからね。ただし、幹候仲間にはいった時期からは、こんどは両横に寝ている同級同格の連中が私の世話をしなけりゃならない。整頓をきちっとしないと、全員が殴り倒されますからね。ですから、いまだにその連中はボクをニクんでいます。(笑) 連中が訪ねてきて、家内が、「兵隊さんのときはお世話になったそうで」というと、そのときだけは笑顔が消えるんですよ。(笑)

そんな人間でもあの時代は将校にした。

歴史というのは厄介で、一時代すぎると、前の時代の気分がわからなくなります。たとえば、ああいう将校をエリートだと思ふ人が出てきている。幹部候補生出身の将校は人民でないみたいに思っている。あれは、まさしく人民そのものなんですがね。

軍隊内の非エリート

山本 そうですね。私たちのところでも、幹部候補生は「員数将校」、「兵隊将校」という言い方をされた。つまり、本物の将校じゃない。召集された兵隊と同じだ、というわけですね。じつにさまざまな蔑称があった。

司馬 「お国のためには兵隊さんばかり」といった、あの歌を憶えてらっしゃいますか。

山本 そうそう。「兵隊ばかりが国のため」とかいいましたね。「将校商売、下士勝手、兵隊ばかりが国のため」――。

司馬 そうでしたね。つまり、この意味は狩り出されてきたのが兵隊さんというわけですが、幹部候補生の将校も商売でないから兵隊将校ということになる。

「幹候」という言葉には、軽蔑の語感がある。当時、火薬のつまった砲弾もしくは小銃弾のことを実包というでしょう。士官学校出の将校のことを実包という。われわれは「空包」といわれたり、擬制弾といわれたりした。私が行った戦車学校というのは、他の兵科でいうと予備士官学校にあたるんですけれども、そこには優秀な曹長が助教に配属されていた。卒業するとき、私どもの助教がいうんですね。「おまえらが小隊長になるとしたら、命が縮むなあ」(笑)

山本 私は砲兵の観測で測量ばかりやっていたんですが、Nという助教が、「去年卒業した生徒も、八割まで何をやらされているやらわからなかったようだ。これでは、砲弾がどこに落

ちるのやら」って、言っていました。(笑)ですから、そういう考えをみな持っていたようですね。

司馬 幹部候補生というニュアンスを説明するためには、明治、大正、昭和初期とつづいた陸軍の「一年志願兵」という制度から入って行かなきゃならないんですが、これはどうもドイツのユンカー(大地主)の志願兵制度を意識したものらしい。

もともと日本陸軍というのは、ドイツの直輸入というか、ほとんど直訳でその制度を取り入れたでしょう。このごろ知ったんですがそのドイツに、一年志願兵という制度があるんです。ユンカーで、正規将校にならない人、あるいは在郷の人にたいして、一年間の教育をし、少尉にしておく。それはドイツという、当時ヨーロッパで遅れた社会では、ユンカーが指導者階級として小作人をひきい戦場に行くという、古いしきたりがあったんでしょうね。

山本 ええ。

司馬 ところが、こちら側は、明治社会は前提として平等の一階級社会です。実質的にもそうで、ユンカー階級はない。それに代わるものとして、商業学校や農学校の卒業者にたいして一定の教育を受けさせて、一年で見習士官にする。そしてもう一度召集して予備役少尉にする、という制度がありましたね。

たとえば、日露戦争の例でいえば、堺の鳳家の当主は堺中学か堺商業かを出て旅順攻略に加わる。一年志願兵の少尉ですね。それを鳳晶子——与謝野晶子さんが、「君死に給ふことなかれ」という詩に書く。要するに、在郷の市民兵というイメージは、あれがいちばん明快なんで